

# 流星物質

## *Girl Beats Girl 2*

サンプルです



## 流星物質 Girl Beats Girl2 試し読み 目次

- ・ 憧 kiss ..... 3  
珠洲鈴涼理 / 後輩×センパイ
- ・ あの娘とわたしのバージンロード☆ ..... 9  
平山ひろてる / 姉×妹
- ・ 不器用ガール ..... 13  
文里荒城 / 委員長×不良
- ・ 百合の原稿を頼まれた。  
    どうしようかと思ったけど、  
    とりあえず書いてみてるなう。 ..... 16  
すみやき / 店員×作家
- ・ もかまき。 ..... 19  
珠洲鈴涼理 / 元気×いぢわる
- ・ 奥付 ..... 21

「すき！ キスしよ！」

小学校時代の親友は挨拶代わりにそう言った。それは私がもう十歳くらい若いときの口癖だ。

「今も好きなら昔みたいにチュウしていいよー？」

「じゃあ好きだからキスするね！」

「んーん、だーめ」

あっちにとつては他愛のない冗談を交わしてから、お茶しに行く。

昔の私はいわゆる《キス魔》だった。昔の友達と会うと決まって槍玉に上げられて、いじられる。

「里々の好きってほんとにハードル低かったから、保育園の同じ組でキスされてない子はいないよねー。男のせんせーなんかすっごい意識してたし」

となると二十人くらいかな。数人は覚えあるんだけど、全員は……。そも今じゃ顔も覚えてない人多数。

何かあれば常に口づけで愛を確かめ合っていた両親を見て、育つて、同様にキスをもらっていた私は好きな人にはキスをするものだ、それが褒められることだと信じて疑わなかった。

子供のスキンシップ程度の愛をずっと覚えてるのなん

か数人くらいだろうし、語られて思い出として記憶に留めてる人ぐらいじゃないかな。

「ちよっとトイレ行ってくるねー」

彼女が席を立つ。ふわっと広がるシトラスの香り。ほうき星みたいな尾を引くロングスカートが見えなくなるまで、おっとり歩調の彼女を目で追う。

「……はあ、キスしなかったなあ」

冗談ってわかってたけど、どきどきした。

させてくれるのなら濃い紅色の口紅を唇越しに奪って。首筋に求愛して。幼少のキス跡を上塗りして――。

ふと彼女が注文したカフェラテの、湯気の休まったカップが目に入る。

彼女がお花を摘んでる内に間接キス、しちやおっかな。間接キスなら、だいじようぶだよね……。

人を誘って、ウソでもキスしよなんていうのがいけないの、里々ちよっとガマンできない……っ。

「おまたせー」

カップに伸ばそうとしていた手が止まる。

「ふー。あ、いない間に私の飲んだりしてないよね？」

「ま、まさかあー」凶星。鼓動が乱れる。

「だよ。そうだ、里々のことだし、さすがにもう本物のキスはしてるでしょ。誰と？ 彼氏？」

「ううん、初めてはまだ、だよ」

見境なしに愛を口移ししていた私も、ほっぺやおでこ、首元に刻むだけで——キス魔をやめるまで一度も、唇同士を重ねたことはなかった。それは両親みたいに本当の好きがするんだと、女の子の本能でセーブしてた。

ただどこもちよさそーに両親がしてるのを目の前で見せつけられて、興味の塊だった私が我慢できるはずなくて。一番仲の良い男の子としようと思ってた時、私のキス癖を知った父親はこう言った。

「実は里々はな、口同士でキスをするって死んじゃうんだ」私を溺愛してくれた母も父も唇にだけ愛をくれなかった。頬にばかり塗りたくられた愛が不満だった。

その日以来私はキスをしなくなつた。普段通りほっぺにするのは問題ないはずなのに、我慢した。

そも小学校に入学する直前の話。誰と誰がキスをしたとはやし立てられる年頃だった。

年を取るごとに口づけは、好きの証ではなくて理不尽に抑制された欲求を解放する行為に変わっていった。

ごくたまに行き過ぎたスキンシップの延長で女の子の肌にチューができるくらい。第二次性徴が来た頃には好きだからキスをするんじゃないやなくて、ただキスがしたいだけ、誰にも明かすことのできない欲望になった。

曰く私は唇にキスをするって死ぬ病。  
だから三船里々は本当のキスの味を知らない。

\* 1 \*

「女子バレー部二年、緒方千豊です」

壇上で声を張る先輩の姿をぼんやりと見つめる。

「今日は欠席したキャプテンに代わりまして、副キャプテンの私がバレー部を紹介します」

高校生。この春、淡い桃色の桜と一緒に花を咲かせる私たち新一年生は、講堂に集められて部活動紹介を聞いています。

真新しい制服を着る誰もが耳を傾ける中、きつと私だけが……うん、どうだろ。あの先輩、とてもキレイだから女子バレー部とは関係ない男子も見てるかも。

滑舌のいい部活動紹介、その声を発してる口に意識を傾ける。なめらかに音を紡ぐ唇。あの色めくトビラに私をを重ねられたら。

つややかで、いろいろのいいあかいろの、くちびる。

「キスしたい」

あつ。声、でちゃった……。

顔を伏せて横を伺うと、同じクラスの男の子がちらつとこつちを見た。どうしよ、顔、赤くなつてないかな。

あ、男の子もちよつと赤くなってる。

私があつちな子みたいに思われてるかも。第一印象さ

「いあく……でも、唇がむずむずする、しょうがない。顔を上げると一緒に拍手が巻き起こる。ちょうど先輩の紹介が終わって、おじきをしていた。」

「一礼の終わった先輩と目が合う。ううん、気のせい。だって私は先輩の微笑むくちびるを見ていたから。」

「もっと近くで眺めたいな。だってステージの上と下じや全然わかんない。」

「いつの間にか部活動紹介は全部終わってて、同級生に混じって廊下を歩いていて。」

「遠目に見るだけでどきどきする。じゃあ近くで見るとかできたらどうなっちゃうんだろ？ もっとドキドキするかな？ キスしたくなるくちびるっていっぱい見たことあるけど、遠いのに魅力的なのってはじめで、かも。ほしく、なってしまうそう。」

「あの先輩とキスしたいな。」

「キス。ちゅー。口づけ。接吻。ペーゼ。」

「教室で。帰り道で。体育館で。お家で。みんなの前で？ 触れるだけ。息が切れるまで。連続。ずーっと。舌っ。」

「ぼふ。」

「目の前が真っ暗になる。顔、布の感触。」

「あつ、えつ、大丈夫ですか？」

「前を歩いていた男子にぶつかってしまった。恥ずかしくてぼそっと謝るのが精一杯だった。」

「そして振り向いた男の子の唇をついつい見ちゃって。かさかさで味気ない色。キスしたいくちびるじゃ、ない。先輩の唇が、気になる。」

「放課後、真っ先に私はバレエ部が活動する第二体育館に直行しました。」

「お目当てはやっぱ部活動紹介をしていた先輩。」

「バレエ経験者なのか自分より大きい見学生徒の中に埋もれながらもコートでトス練習をしている先輩たちを見渡す。いた。比較的身長の高い女子バレエ部の中で一番おっきいんだ。すごい目立ってる。百七十くらいあるのかな。」

「すらりとした長身。モデル体型。ジャージの上の膨らみも、目立ってる。全然育ってない私からすると羨ましいな。腰までたなびく髪の毛がすごいオトナっぽくて……あつ部活のときはシュッシュで括ってるんだ。」

「それに顔立ちもオトナ！ って感じで、高校生、それもひとつ上ってほんとなのかな。ほうき星みたいな柳眉、きりりとした双眸、それとくちびる。」

「私と同じくちびるなのに、どうしてこう惹かれるんだろ？ すっごいぶっくりしてて、いちごみたいにあかくて、くちのはしっこまできれいにせんがつながってるの。」

「あ、ほほんだときにくいってよこにのびるくちびるも、きれーだな……。」

きすしたい。

トス練習はいつしか終わって、サーブ練習に。ネットを挟んで対面した部員たちが交互にボールを交わす。弾と床を跳ねる白、ネットを掠め落ちる白。

先輩のいる場所と遠い。流れ玉に注意しながら見学場所を移す。先輩が練習してるコート側の横、ネットのすぐそば。

高く高く跳んでボールを打つ先輩の姿、かっこいいなあ。私なんか運動オンチだし、ちっちゃいからあんま映えないよね。

先輩みたいに、オトナっぽくてかっこいい女性になりたい。そしたら、あんなくちびるになるかな？

「あ、危ない！」

コート向こうの生徒が何かを叫んだ、同時、私の視界が真っ暗に——衝撃。バレーボールが、飛んで来て——

\* 2 \*

キスをしたら死ぬ。

わかっていながら誰かの唇を凝視するのは遊園地のアトラクションでスリルを味わうのと同じだね。あの唇とキスがしたい、でも死ぬから……の繰り返し。

病気だから治るよね？ と文字通り涙を枯らすまで泣

き縫った夜、オトナになれば治るよ、お父さんも同じ病気だったんだ、と諭されながら泣き疲れて眠ったことを今でも忘れることができない。

十五歳。あまりにも長過ぎる五年間。オトナの定義がわからないけど、少なくとも顔つきもカラダもオトナじゃないっていうのは、お母さんとかあの先輩を参考にすればわかることだった。

友達にオトナの定義を聞くと成人したら、恋人ができれば、子供が産めるようになったら、卒業して一人暮らしできたら、〇〇〇をししたら、オトナになったと思っただらその時点で、とか答えは様々だったな。

そして誰もキスをしたらオトナ、なんて乙女チックな回答をしなかったのが地味に辛かった。

キス——あの先輩とできたら、オトナになれて病気も……。柔らかな感触。熱い吐息。私のこどもリップを先輩の大人リップが塞いで——。

「ん……」

息苦しさを感じて意識が起きる。酸素を求めて肺と心臓が脈打つ。寝てただけなのに呼吸を忘れちゃうなんて、夢の中でキスしてただけなのに……。はあ。

まるで夢じゃなかったみたいなの、くちびるに残るぬくもり。呼吸は落ち着いたのに高鳴った鼓動が収まらない。そっか、顔にバレーボールがぶつかって、倒れたんだ。

多分ここは保健室のベッドの上。倒れてぶつけたのか後頭部がひりひりする。それに鼻も熱い……あ、なんか詰められてる。ティッシュかな。鼻血出しちゃったんだ。これは確かに息苦しいかも。でも鼻も口を塞がれたみたいな感覚は——？

「あ、起こしちゃったかしら？」

「えと、せん、ばい？」

目を開けると起き上がればぶつかるぐらいの距離に艶やかに赤いくちびる——じゃなくて。部活動紹介をしていた、凛々しくサーブを打っていた、あの先輩の顔が。近い、近いよ！

先輩は隣にあった椅子に腰掛け、どこか赤く上気した面立ちで微笑み、

「具合はどう？ 痛くなかった？」

すぐそこに、私を吸い込もうとする唇がある。とっさに掛け布団をたぐり寄せ、きつと真っ赤になってるだろう顔を隠した。

「はい、だいじよぶです、でもなんだか、心臓がばくばくしてます……」

先輩のせいだ。微笑んだときの先輩の唇が、まるで私を誘ってるみたいで、ん……。

「ごめんなさいね」

「なんで謝るんですか？ 私のこと、見てくれるのに、

私こそ」

「ううん、里々ちゃんがぶつかったボールなんだけど、私がミスして打っちゃったの。せつかく見に来てもらってたのに、本当にごめんなさい」

「ん、いえ、ぼーっとしてた私も悪いですし」

ずっと唇ばかり目で追ってた罰なのかも。

「それに寝てたあなたに……ううん、なんでもないわ」

ごもる先輩が気になってそろっと顔を出すと、目が合う。先輩が恥ずかしそうに目を逸らした。

「起きたみたいだし、私は戻るわね」

えっ、そんな、もうちよつといてくれませんか。とはとても言えなくて。

「落ち着いたら今日は帰って、もしその、赦してくれるのなら、また明日、見に来てね」

最後まで先輩は申し訳なさそうな表情のまま、

「本当に、ごめんなさいね」

人差し指で自分の唇を撫でて、足早にカーテンの向こうに消えた。

唇が疼く。ちよつと無理すれば届く距離にあの、私を魅了してやまない扉があった。

夢で見た、先輩とのキスの続きがしたい。目をつむるけど、唇がぞくぞくして落ち着かない。夢の中なら死ななくて済むのに。

「キスしたい、センパイ……」

唇が乾く。慰めるように舌で舐める。傷のない皺を横撫するだけで火照りは冷めなくて——あれ？

「くすりの、味がする……」

リップクリームかな、ミントというかメンソールのツンとした味。でも私、リップクリームなんかしないのにな。

まるで見えない口紅が残されたみたいなの違和感と感覚。

「まさか、センパイ、里々に、ちゅー……」

だって塗ったことのないクリームがついてるし、唇がもぞもぞするし、それに起きた時の息苦しさ……鼻はテイスシュが詰められてて、じゃあ口で呼吸するから、でもその口が塞がれてたら——。

ぼっ。全身を名状しがたい痺れが走る。顔が熱い。動悸が止まらない。色々なところがかゆい。

「センパイに、キスされちゃった……の？」

でも生きてる。この鼓動の爆発は死ぬ前兆なのかな。

起きてベッドを降り、ついさっきまで私の顔があったところに顔を近づける。寝ている私に、センパイはこうやって……！！

「かつ、かえろ！」

そそくさと掛け布団と敷布団を畳み、無人の保健室を後にする。

結局その日、何も手がつかず、行き場のない欲求をどうにかしたくて自分のカラダに口づけを繰り返してしまっただ。

もうしないって、決めてたのに……。何でもいからキスしたかった。足に、腕に。手首の肉を集めてチューすると唇と同じ感触だって聞いて、赤く腫れるまでペーゼを重ね——いつの間にか眠りに落ちていた。

そして、センパイにキスをされる夢を見ました。

保健室のベッドの上に押し倒されて、両手を押さえつけられて、ハダカのセンパイが嫌がる里々の唇を無理やり……。

息ができなくてももう死んでしまおう——というところで目が覚めた。同時に自分が生きていると実感する。

キスで死ぬ病が治ったのか、そもそもそんな病気なんかははじめからなかったのか。もしくは里々がも——そ——してただけで、キスなんかされてなくて。

汗びっしょりになって上体を起こし里々の頭の中を渦巻くのは、ついさっきの夢のキス。

名状しがたい感覚をどうすることもできなくて、シャワーを浴びにいった。冷水を浴びても静まらない熱っぽさ。火照り。夢でもいいから、もっとキスを——。

そうして長い長いシャワーの後、私は高校生活三日目にして遅刻をしていることに気がつくのだった。



あの娘とわたしのバージンロード☆

平山ひろてる

「赤ちゃんってどこからくるのー？」

爽やかな朝。食後。

わたしは妹クロエの唐突なネタ振りに、ぶふおつ、と飲んでいたダージリンを嘔き出してしまった。何言ってるの、この子は。

「……からかってるでしょ？」

だって、にやにやしてるもん。紅茶のカップを手に持ちながら、乙女がしちやいけない顔してるから。

「びんぼーん！」

からからと、声を弾ませて笑うクロエ。やれやれ。この子は本当に、いつまでも子供っぽいんだから。でも、それが可愛いところではあるんだけどね。

「もう……はあ」

汚してしまったテーブルを、タオルで拭き取りながらため息をつく。

「あー。おねーちゃんため息だー。かわいい妹の前でそんなのやめてよー！」

「元凶はクロエだよね……？」

きゃっきゃと騒ぐ妹を、恨めしそうに見つめるわたし。でも、それが彼女にとっては面白いみたいで。

「えー、あたし？ そんなことないよー、おねえちゃんがそういう耐性ないのが悪いんじゃないのおー？」

もう、なんだかちよっぴり面白くない。

「ふうーん。そういうえば、クロエって」

「ふえ？」

ティーカップを持ったまま、何を言うんだろうおねーちゃんみたいな表情。

「夜はあんなにしおらしいのに、昼間は本当に元気だよね？」

ちよっぴり、おじさんっぽいかなって思った。けど、彼女に対してはこういう言い方が効果的。

「そっ、そんなこと言ったって……」

ほら、顔を真っ赤にして俯いた。

普段は強気なくせに、攻めるのは得意なくせに、逆にやられると弱い。そんなところが可愛い。おねーちゃんはそのいうのをよくわかっているつもりだ。

「はいはい、片付けるよクロエ。学校行かないといけないでしょ？」

「あー！ もうこんな時間、行かなきゃ！」  
壁にかけられた時計を見て、わたわたしだすクロエ。

こういうところはあんまり要領が良くない。

「落ち着いて、まだ大丈夫だから。ね？」  
声をかけてあげるけど、やっぱり焦ってる。

「でもでもー……今日遅刻したら、せんせーに怒られちゃうよっ……」

仕方ない。安心させてあげるしかない。こういうのは、おねえちゃんの勤めだと思おうし、この子の『彼女』としても、やらないといけないことだよね。

「走れば余裕で間に合うよ、クロエ。それとも、シルビアおねえちゃんのこと、信じられない？」

「……信じてるけど」

こくりと、頷く。それでもまだ表情には不安の色。

「じゃあ、大丈夫でしょ？」

「だい……大丈夫な気持ちになってきた！」

ぐっと胸の前でガッツポーズ。

ちよろいよね。わたしの妹ながら、ちよっと心配になる。

「ん、じゃあ行つてらっしゃい」

わたしも早く片付けて行かなきゃ。クロエは早めに行つて友達と遊んでみたい。そういうのつてなんだか面倒くさいし。だから友達付き合いが悪いと言われるのかもしれないけど。

「……」

どうしたんだろう？ カバンを手に持ったまま、クロエはその場にとどまって、何か言いたそうにこっちを見る。

「どうしたの？」

尋ねてみると、頬を赤らめて。

「行ってきますの、ちゅー、してくれないの？」

そういうことね。甘えんぼうなんだから。

「はいはい」

テーブルの上を片付ける手を止めて、リビングの扉ドア近くで照れくさそうに佇むクロエのところまで、ゆっくりと移動。

その間、クロエはきよろきよろと周囲を見渡して、どこか落ち着きない感じ。可愛い。

「クロエ」

近づき、声をかける。

「おねえちゃあん……」

頬を上気させ、ぼうつと瞳をとろけさせるクロエ。普段の強気な、小生意気な態度はそこにはなかった。そこが愛おしいところなんだけど。

「……」

黙って、彼女の下顎を右手の人差し指で、少し上に向かって傾け。クロエはされるがままで、全てを受け入れたかのように、瞳をゆつくりと閉じる。

「可愛いよ、クロエ」

囁くように言うと、むずむずと目のあたりの筋肉を微かに震わせた。照れくさいのかな。

わたしたち以外には誰もいないリビングで、つけっぱなしになったテレビから響き渡る、アナウンサーのリポートを聞きながら。

「……ん」

わたしは、クロエの両頬をしつかりと支える。指先から伝わってくる柔らかな感触と、ほんのりとした体温。それが胸の奥をざわざわさせた。

ゆっくりと狙いをつけて、彼女のふるぶると血色の良い唇を目がけ、合わせていく。そのとき、ふと香るクロエの普段使いしている、シトラスミントのシャンプーの香りが身体の奥をくすぐった。

近づいていくにつれて、彼女の鼻を抜ける息遣いが微かに聞こえて、どうしようもなくわたしの気持ちを高まらせる。

そして。

「……っ」

口の中から全身が蕩けていくような、そんな錯覚すら覚える接触。ぽかぽかと温かい、まるでマシユマロのように柔らかな感覚が、わたしの身体を包み込む。

その触れ合いは、まるで永遠のようにも思えた。

瞳を閉じて、お互いの温かさや温かさを重ねあわせ、何度も彼女の口腔に舌を這わせ、彼女のものと絡ませ、快楽を求めていく。

離したくない、このままずっとクロエのぽかぽかを感じていたい。

テレビの音が、どこか遠くに聞こえる。意識はどこかぼうっとしていて、身体がここにはないみたいで。クロエと一緒になくなってしまったような、そんな気がして。

「んーっ！ んんーっ！」

ばんばん、と抗議するようなクロエに背中を叩かれたときに、数分間キスをしていたんだってことに、気付かされた。一瞬だったはずなのに。

「ふはあっ！」

息苦しそうに、顔を真っ赤にしてるクロエ。そういうところもすっごく可愛らしいと思う。

「おねえちゃん！ あたしを殺すつもりなのっ？」

ふくつと頬を膨らませるクロエ。そんなつもりはなかったんだけどな。

「でも気持よかったよね？」

尋ねると。

「うー！ そうだけど、気持ちよかったけどー！」  
なら、良かった。

「じゃあ、学校行ったほうがいいよ？」

そろそろ本格的に遅刻しそうな時間だしね、とわたしは壁時計を見つめながら言った。

「ちっがー！ ちがうのー！ そうじゃなくて、あた

しがもう息苦しいから離してって言ったのに、どうして  
 どうしてずっとキスしてきたのー！」

「そうだったけ？ 言ってたっけ？」

「どうか、口を塞いでるから声なんて出せなくないかな？ 単純な疑問。」

「言ってくれた？」

「へ？」

「苦しいから離してって、言ってくれた？」

「すると。」

「言えるわけじゃないじゃんっ！ おくちをぶちゅってされるのにっ！」

「だよ。怒ってる怒ってる。」

「あたし目で言ったよっ！ そろそろ苦しいから離して  
 って、なのにおねえちゃん、目を瞑って舌を入れてくる  
 しっ！ デリカシーないよ！」

「ぶんすかぶんすかと、頬を膨らませたままのクロエ。」

「んー、そんなに怒ることかなあ？」

「でも、気持ちよかったですよ？」

「ぴつとりと、彼女の下唇に人さし指を当てる。すると  
 しゅぼんという擬音が聞こえてきそうな感じで。」

「……よかった、けど」

「どうやら、落ち着いてくれたみたい。」

「おねえちゃんも気持ちよかったですよ。ほら、学校行かな

「いといけないよね？」

「うー……」

「なんだか腑に落ちてない感じで、もじもじと身体をく  
 ねらせてる。もしかして、まだ足りないのかな？」

「もう一回、キスする？」

「しないよっ？」

「否定されちゃった。」

「そういうことじゃないみたい。」

「もー、これ以上ここにいたら身体がもたないよっ！

「あたし、学校いつてくる！」

「気をつけてね」

「もーっ、おねえちゃんのばかりっ！ いってきまあー

「すっ！」

「文句を言いながらも、どこか嬉しそうに。ととととと  
 駆け出していく、クロエの後ろ姿を見つめながら。」

「わたしはどうして、馬鹿って呼ばれたんだろう？ と、

「考えることにした。結局、よくわかんなかった。」

## 不器用ガール

ふみさじあらか  
文里荒城

昼休みの教室は喧騒に包まれている。

そんな中、相上真奈都は腰に両手を当てて、言った。

「坂倉さん、国語のノート」

眼鏡と、二つにまとめられた三つ編みが特徴の少女は、決して悪い容姿ではない。

眼鏡の奥の目は、さほど大きくないながらもぼつちりとした二重で、眼鏡の乗っている鼻筋もスツと通っている。スタイルも、痩せすぎでおらず、だからといって太くもない、高校一年生の女生徒としては一般的なそれだ。ただし、無造作にまとめられた長い三つ編みや、校則に則ってぴつちりと着こなされた制服が、彼女の印象を大人しくて真面目そうな——悪く言えばダサイものに変えていた。

そんな真奈都の目線の先にいるのは、気怠そうに机に頬杖をついてイスに座っている、クラスメイトの坂倉紗彩。うつつらと化粧しているらしい彼女の容姿は、クラスでも一、二を争うほど綺麗だ。短く折ったスカートから伸びる足は細く、カッターシャツから覗く胸元も、女子高生にしてはそれなりに豊満なものである。

「ない」

一瞬だけ真奈都を見た紗彩は、素っ気なく答えるとぶいと横を向いた。その小さな動作に、彼女の長い茶色の髪が揺れる。

背中の中ほどまで伸ばされた茶色の髪は、緩くパーマがかかっている。どれくらい明るくてパーマがかかっているかというと、入学式当日、生徒指導の先生に怒られたくらいだ。

しかしその髪が地毛であることを真奈都は知っていた。だからそのとき、生徒指導の先生に真奈都は「彼女の髪は地毛なので怒るのは見当違いだと思います」と言った。何故真奈都がそんなことを知っているかという、紗彩と仲がいいから——ではなく、ただ単純に彼女とは、中学生のとき一年だけ同じクラスだったからだ。

ほとんど喋ったこともないが、真奈都は彼女の髪を羨ましいと思っていた。剛毛で真っ黒な髪の毛は三つ編み以外に似合う髪型がないような気がして、だから真奈都の髪型はいつもそれだ。

「ないじゃないでしよう？ クラス委員として、放課後までにノートを提出しなければいけないの。あとは貴女だけよ」

「まだあと二時間あるだろ」

「貴女が残り二時間で自主的にノートを出してくれるとは思えなくて」

「国語のノートくらい出さなくても死にやあしないだろ。誰に迷惑かけてるわけでもないのに」

「私が迷惑なの」

「あたしなんか無視しろよ」

「そんなわけにはいかないわ。先生に全員分って頼まれるのに、貴女を無視するわけにもいかないじゃない」  
「淡々と真奈都が言えば、紗彩はそっぽを向いたまま、形のいい唇を吊り上げた。」

「はっ、そんな真面目だから友達いねーんだよ」

「友達なんていなくて結構。それより早くノート出さない」

「ねえよんなもん。じゃあな」

「あっ、待ちなさい！」

イスから立ち上がった紗彩は、膝上丈のスカートを翻すようにして、駆け足で教室を飛び出していった。反射的に真奈都も追いかける。

「紗彩と委員長、毎日よくやるよねー」

教室を出て行く際真奈都の耳に、クラスメイトのそんな声が聞こえてきた。

真面目な委員長である真奈都と、見た目ギョルであり不真面目な紗彩のやり取りは、今ではクラスの日常風景なのだ。

「待ちなさい坂倉さん！」

紗彩を追いかける真奈都の声が、廊下に響き渡る。

\* \* \*

真奈都は付き合いが苦手だ。しかし寂しいとは思っていない。クラスに友人と呼べるほど親しい相手がいない。独りでいることを苦に思ったことはない。

だが普段苦に思っていないくても、困るときは、ある。「はい、それではペアを作ってください」

グラウンドで教師がそう指示を出す。

六時間目の授業は体育だ。今回の内容は、二人一組のペアになって体操をするというもの。

教師の指示によって、生徒達はそれぞれ友人とペアを作っていく。

「うーん……」

それを横目で見ながら、真奈都はどうしようと唸った。友人がいないことを寂しいとは思わないが、こういう場合は、少し困る。

まあいつものことだし、先生と組めばいいか。

そう真奈都が楽観的に考えていると。

「委員長」

真奈都を呼ぶ声があった。その声は人付き合いが苦手な真奈都にとっては珍しく聞き慣れた声で、真奈都は微妙

に嫌そうな顔をしながら振り返った。

「……何？ 坂倉さん」

予想通り振り返った後ろに立っていたのは、国語のノートを提出せずに真奈都から逃げきった紗彩だった。長い髪を後ろで一つにまとめている。

「委員長のことだからペアいないんだろ？」

「別に。先生と組むから」

「さっぴしー」

クスツと笑うその声に、喧嘩でも売っているんだろうか、と真奈都は思う。それが無意識に表情に出て、真奈都の眉根がムツと寄った。

「それより貴女はノートを早く提出して」

「えー。今もそれ言うー？ 本当、真面目というかなんとかさー。……ま、委員長はそれがいつものことだけど。で、ペアだけど、仕方ないからあたしが組んであげるよ」

「結構です」

笑顔で言ってきた紗彩に、真奈都は間髪入れず返した。紗彩は友人が多いので、組む相手がいないというわけではない。それなのに彼女はこういうとき、いつも真奈都のところに来て来る。

紗彩を無視しようとした真奈都だったが、真奈都と紗彩以外のクラスメイトは全員がペアになったらしい。

「はい、それでは始めます」

真奈都と紗彩がペアになったと勝手に思い込んだ先生が、そう指示を出す。

そうなれば今さら先生に、ペアになる相手がいません、とも言えず、真奈都は唇をへの字に曲げた。

「ほら委員長、始まるよ」

そして結局真奈都は、唇の両端を吊り上げている紗彩と、ペアを組む羽目になったのだった。

百合の原稿を頼まれた。

どうしようかと思っただけど、

とりあえず書いてみるなう。

すみやき

だんだんとお客さんがお店からいなくなっていく。

なんだろう。この切なさとお寂しさは。と言っても、「切なさ」と「寂しさ」の違いがよくわからないんだよね。

二十年以上生きてるってのに、世の中はまだわからないことだらけだ。

まあ、とにかく「切なさ」と「寂しさ」を足して二で割って、忍法使って空飛んで、花が咲いたらじゃんけんぼん、的な気分なのだ。

この感覚を前に味わったことがある気がする。えーと、うん、あれだ。小学校の時だ。

テストか何かをしたんだと思う。あ、そうだ。確か、あの時はテストが解き終わった人から校庭で遊んでよかったんだ。

季節は冬で、校庭にはたくさん雪が積もってて……それでクラスメイトはさっさと終わらせて雪遊びがしたい……って早めに解いて、それで、みんなで外に出て行くっちゃったんだっけ。

今もどんくさい私は、予想を裏切ることなく、子ども

の時もどんくさいかった。かけっこも遅くて、給食を食べるのも遅くて、それで、テストの問題を解きおえるのも遅かった。だから、最後は私だけ残される。

窓の外には、みんなが雪遊びに熱中してて、でも私はまだ回答欄が埋まってない。

それが無性に寂しくて、悲しくて、それで泣いちゃったんだよね。その時の心細さと担任の先生の驚いた顔は今でも覚えている。

そんな私も四捨五入すると三〇歳、さすがにもう大人だから泣いたりはしないが、やっぱり心細いものは心細い。

大人だから泣かない。だけど、大人の方が泣きたいことがいっぱいな気がするんだ。

そもそも、私がいきなり泣き出したりしたらどうなるだろう。

とりあえず、店員のお姉さんがびっくりしてしまおう。あの時の担任の先生と同じような顔をするのだろうか。そうしたら、もうこのファミレスには通えない。唯一の執筆場所なのに。

大学時代にひよんなことから大手出版社の小説新人賞に引っかけた。

それからがちょっとおかしかったのかもしれない。そ



して、ちょっと調子に乗りすぎたのかもしれない。

やっぱりこの世界は甘くない。

作家デビューして、いきなり作品が売れて、そんで小説でご飯が食べられる……なんてことは夢物語の中の夢物語だ。

そもそも、初めて書いた小説を調子に乗って新人賞に投稿した時の私はバカだったし、受賞した瞬間に就職活動を終わりにしてしまった私もバカだった。

そして、出版社との関わりが一切なくなってしまったにも関わらず、仕事もせずに出版される予定のない小説を書き続けている今の自分もバカだ。

ご飯を食べさせてくれる父親との会話を避けている私もバカだし、ご飯を作ってくれている母親に内弁慶的にやつあたりする私もバカだ。大バカやろうだ。

でも、一番バカなのは、『久々に来た原稿依頼の締め切り日なのにまだ原稿が終わっていないやう』な私だろう。しかも、その締め切りというのも頼み込んで延ばしてもらった第二締め切りだというのも大バカやろうなのだ。

原稿依頼と言っても出版社とかそんなんじゃないやなく、同人誌への寄稿だ。

どうやら、プロフィールに書いた受賞歴、あと半分冗談半分本気で書いた「お仕事募集！」という一言を見て

くれた同人サークルの代表さんがツイッターで原稿を依頼してきたのである。

同人誌というジャンルにおいての私は、全くの素人と言っている。

このサークルさんが有名かどうかともわからない。けど、本当に久々の原稿依頼なのと、本当に毎日毎日暇だったので、ノーギャラとのことだったが即OKの返事をしたのである。

しかし、一つ問題があった。その同人誌には一つのジャンル縛りが存在したのである。

それが『百合』。「女子同士がいちゃいちゃうふふ」なあれだ。私の頭の中に一ミクロンも存在しないジャンルのあれだ。

サークル代表の方はもしかしたら、私を男だと思ったのかもしれない。

というのも、私が書いているのは男子向けライトノベルで、それにあわせてペンネームも女性とはわからないものにしてある。

私が思うに男子向けライトノベル界における百合は、「女子同士がいちゃいちゃうふふ」が好きな男性作者が書き、「女子同士がいちゃいちゃうふふ」が好きな男性読者が読む、そんなものだと思うのだ。

戦う男の子が好きすぎて、男子主人公のファンタジー

ものを書いてある私にとっては全く興味のわかないジャンルだ。

でも、引き受けてしまったものは、引き受けてしまったので書き上げないといけない。

そんなこんなでファミレスに缶詰になっているわけ……。

「すいません」

店員のお姉さんが私に話しかけてくる。え、なんですか。私まだ泣いてませんけど。確かに「切ない」と「寂しい」の間に挟まれて、泣きそうではあるのだけれど。

でも、もし涙を流してしまっていたらごめん下さい。あまりまずから！

「ラストオーダーのお時間ですが、ご注文の方大丈夫でしょうか」

よかった。別に私が泣いていたわけではなかったらしい。

「大丈夫です」とだけ言うと店員のお姉さんは去って行く。まあ、ラストオーダーを聞いているフリをして「さつさと帰れよ。このノートが！」って言うてる（気がする）わけであるから、私はさつさとこのファミレスから退散しないといけない。

けど、ドリンクバーのハーブテイの飲み過ぎでトイレ

が近いので、出すもの出してから帰ることにする。

いつも、ファミレスで一人執筆しているとトイレを我慢してしまう。

テーブルにノートパソコンが置きっぱなしになってしまふからだ。かと言って、トイレにノートパソコンを持ち込むのはなんか変な気がする。

文章を打ち込むだけの小さなパソコン型デジタルメモみたいなものが売っているらしいのだが、ノート作家の私にはそんなものを買うお金はない。このファミレスでドリンクバーと一番安いゼロリのピクルスを頼むことで金銭面は精一杯だ。

店員のお姉さんがブラインドをおろし始めている今の時間は、お客は私以外いないようだ。

テーブルにノートパソコンを置いて、トイレをすませることにした。

もかまき。

珠洲鈴涼理

「マキちゃん大変！ わたしとマキちゃんが付き合ってるって噂が流れてる！」

「落ち着いてモカちゃん。何か問題でも？」

「いやどう考えても問題だよ？ だってわたし彼氏いる！ 浮気じゃん！」

「彼氏いなかったら問題ないみたいない方ね」

「うん問題なんか何もないよ！ だってマキちゃんのと好きだし！」

「私はモカちゃんのこと嫌い」

「うそついてる！ 噂流したのマキちゃんでしょ！」

「んーん、違うわ」

「だっていつも体育のお着替えのとき凝視してくるし！ たまにロッカーから制服とか取り出して匂いかいできるよね！ あと最近下着なくした！ もってつてない!?」

「ええ。それが噂を流したって証拠になるの？」

「開き直った！ ていうか下着！」

「下着？ なんのこと？」

「ごまかそうとしてる！」

「だって本当のことだし隠しても」

「じゃあ噂は流してないっていうんだ！」

「ええ。私に何のメリットがあるのかしら？」

「このわたしと流れて付き合える！ すごい！」

「だから私はモカちゃんがきれいな」

「なんで！」

「嫌いな人に嫌いな理由言ってどうなるの？」

「改善します！」

「されたくないから言わないの」

「言い方悪かったかな！ じゃあモカの悪いところ善処します！」

「善処しますって説得力ないわよね」

「そうだね！」

「…そのテンション高いの、どうにかならないの？」

「きれい？」

「うるさいもの。苦手」

「お、嫌いなところ言った！ 直します！」

「直ってないわ」

「だってこれが私だし！ ほんとーの私がイヤならそれはそれで仕方ないよね！」

「善処しますって言ったのはどうなるの？」

「知ってる？ 善処しますってのはするつもりないけどとりあえずその場を取り繕うために言い放つ逃げ文句だよ！ よく偉い人が使うね！」

「さっき私が説得力ないわって言ったばかりじゃない」

「どうだ説得力ないでしょ！」

「有言実行ね」

「とりあえず噂を流したのはマキちゃんじゃないんだ！」

「だって言ってるじゃない。じゃあもし私が『三組のマキとモカが付き合ってる！ ばねー！』って噂を流すわけじゃないじゃない」

「なんだ今のセリフ！」

「……モカちゃんの真似よ」

「わたしそんなにうざい言い方か！」

「再現したの」

「うん、うるさくてごめんね」

「いきなりしおらしくならないで」

「だってマキちゃんがうるさいわたし嫌いって」

「だからってほんとーのわたしを捻じ曲げるの？ さっきそれがイヤなら仕方ないよねって言ったじゃない」

「でもマキちゃんに嫌われるなら静かにします。さっきはウソつきました」

「そう」

「ごめんなさい」

「なんで謝るの」

「だってうるさくて気分害したでしょ？」

「あなたが隣にいるだけですごく心が乱されてるわ」

「そっかー」

「とりあえず噂を流したのは私じゃない。いいわね」

「はい」

「すごい心外。モカちゃんと恋人みたいな関係って不快」

「いや？」

「イヤ」

「じゃあなんでわたしの制服とか勝手に持ってったりするの」

「いじめるためよ」

「じゃあなんで匂いかぐの。体育の途中で抜けだしてわざわざトイレでかいでたの知ってるよ」

「なんで知ってるの？」

「様子が変だったから追いかけた。そしたら人の制服持つってトイレいくし」

「覗き見してたの」

「うん。別にちゃんときれいなままで戻ってたからそれに関しては何も言わないよ」

「そう。それはそれとして噂はイヤ。そんな不快なことが広まったら変な目で見られちゃうじゃない」

「私は変な目で見えないよ」

「知ってる。変な子」

# 流星物質 Girl Beats Girl2

---

珠洲鈴涼理 平山ひろてる 文里荒城 すみやき  
のの 朱

## 文芸サークル『流星ハートビート』

---

2014年 5月 5日 第1刷発行

初出イベント 第十八回文学フリマ

★あら、定価は500円くらいになっていてよ

発行者 珠洲鈴涼理

印刷所 ちょ古っ都製本工房

---

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、  
法律や発行者に認められた場合を除き、著作権の侵害になるらしいです。  
また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、  
いかなる場合でも一切認められませんのでご注意くださいね。  
造本にはちょ古っ都製本工房さんに十分注意してもらっておりますが、  
乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。  
まずは購入されたイベント名を明記して発行者にご連絡ください。  
在庫があれば送料は発行者負担でお取り替え致します、多分。  
但し、よくわからんところで購入したものについてはお取り替え出来ませんよ。  
決まりを破る読者はキスをすると死ぬ病にかかっちゃうからね。

---